

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

岩本 遠億

本稿は、日本語の「出発点」及び「経路」を表す「を」格の意味的特徴と統語的振る舞いを概念意味論の枠組み (Jackendoff 1992, 1996, Iwata 1999) で記述説明することを目指す。(1)に例示される「を」格空間表現の扱いについては、これらを意味格とする分析 (Kuroda 1978, Tsujimura 1992) と構造格とする分析 (Kageyama 1980, 三宅1996) がある。

- (1) a. 義男が家を／から出た
- b. 美子が道を歩いた

意味格とする分析は、これらが二重対格制約に抵触しないことを根拠として、構造的対格と区別することを主張する。一方、構造格とする分析は、Gruber (1965/75)の編入分析を基礎とし、英語の*enter, inhabit*と同様、「出る」「歩く」は意味的前置詞FROM, VIA又はALONGを語彙的に編入する他動詞であると主張する。特に三宅は、出発点の「を」格が着点の「に」格と共起しないという事実を指摘し、それが移動編入分析によって説明できるとする。以下の論考では、これらの相対立する二つの分析で指摘されている事実を統一的に扱う説明を概念意味論を用いて試みる。まず1節で意味格分析を概観し、2節では構造格分析を検討し、その問題点を明らかにする。3節で「～から出る」と「～を出る」の間に見られるアスペクト的相違点を指摘し、説明されるべき事実関係を明確にする。4節では、概念意味論による説明を行う。5節では、[起点]と[着点]の「を」の間に見られる動作主性の違いに概念的意味の観点から説明を与える。6節は結論である。

言語科学研究第7号(2001年)

1. 意味格分析

Kuroda (1978)は、空間関係を表す対格助詞「を」は意味格であるという主張を裏付けるために、二重対格制約に関する事実を用いている。周知のごとく、日本語では単文の中に二つの対格名詞句が存在してはならない。柴谷 (1977, 1978)は、これを「二重対格制約」と呼んでいるが、(2)はその典型的な例である。

- (2) a. 太郎が次郎に本を買わせた
 b. *太郎が次郎を本を買わせた

経路の「を」格も一見「二重対格制約」に従うように思われる。

- (3) a. 太郎が学校の前を通った
 b. 先生が太郎に学校の前を通らせた
 c. ?先生が太郎を学校の前を通らせた
 (4) a. 太郎が公園を歩いた
 b. 先生が太郎に公園を歩かせた
 c. ?先生が太郎を公園を歩かせた

しかし、Kuroda (1978)は、[経路]の「を」格は、通常の対格と疑似分裂文において異なる振る舞いをするを指摘している。(Tsujiura 1992も参照のこと。)

- (5) a. 太郎が新聞を読んだ
 b. 太郎が読んだのは新聞(を)だ
 (6) a. 花子が太郎に読ませたのは新聞(を)だ
 b. *花子が太郎を読ませたのは新聞(を)だ
 (7) a. 太郎が歩いたのは公園(を)だ
 b. 先生が太郎に歩かせたのは公園(を)だ
 c. 先生が太郎を歩かせたのは公園(を)だ

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

- (8) a. 太郎が通ったのは学校の前（を）だ
 b. 先生が太郎に通らせたのは学校の前（を）だ
 c. 先生が太郎を通らせたのは学校の前（を）だ

「読む」のような他動詞の使役文の場合，(6b)のように目的語の「新聞を」を焦点化し，表面的には埋め込み文の中に二つの対格名詞句が現れないようにしても，二重対格制約を免れることはできない。この制約は，顕在的な「を」格の個数を問題にしているのではなく，対格の構造的な付与に関するものだからである。一方，「経路」の「を」を焦点化した擬似分裂文(7c) (8c)においては，被使役者に対格を付与しても非文となることはない。「経路」の「を」は構造的に付与される対格ではなく，意味格であるというのである。

同様のことが起点を表す「を」についても言える。

- (9) a. 太郎が子供達を脱出させたのは，悪霊の村（を）だ。
 b. 花子が子供達を飛び降りさせたのは，3mもある崖（を）だった。

これらのことから，経路および起点を表す「を」格は，構造的対格ではなく，意味格として取り扱わなければならないということになる。

以上が意味格分析である。

2. 構造格分析

次に，空間関係を表す「を」格を構造格とする編入分析を考察する。ここでは，編入分析の中で最も説明力のあると思われる三宅 (1996) を検討の対象とする。

2.1. 三宅の移動編入分析

意味的に斜格の空間表現が統語的に対格名詞句として実現する現象を記述するための手段としてGruber (1965/75)を拠所とする編入分析が一般に行われる。良く知られた例は，英語の*enter*である。Gruberは，意味的前置詞INTOが意味的動詞MOVEに編入されて形成された意味構造#MOVE INTO#に*enter*が語彙挿入された結果，*enter*が統語的に他動詞として機能すると提案した。この提案は，編入を語

言語科学研究第7号(2001年)

彙的なものとする理論 (Jackendoff 1983, 1990など)，統語的なものとする理論 (Baker 1988, Hale and Keyser 1993, 1997など) に形を変えて受け継がれ，意味的に斜格の項を直接目的語とする他動詞構文の分析の基礎となっている。影山 (1977, 1980) は，Gruberの編入分析を日本語の動詞分析に援用し，起点や経路を示す「を」格は意味的前置詞FROM, VIAを編入すると提案している。三宅は，Gruber—影山流の編入分析をBaker流の統語的編入理論に組替え，次の二つの事実に対する説明理論として自らの分析の正当性を主張している。

(10) [着点] をも同時に含意する場合は，[起点] を対格で表示することはできない。

(11) 意思的にコントロールされない移動の場合は，[起点] は対格で表示できない。
(三宅1996: 145)

(12)は [着点] が現れている場合 [起点] を「を」で表示できないことを示すが，(13)は [着点] が顕在的でなく，動詞の語彙的意味として含意されているだけでも，[起点] の「を」格表示が不可能であることを示している。

- (12) a. 太郎が部屋から庭に出た
 b. *太郎が部屋を庭に出た
 c. 太郎が国内から海外に出発した
 d. *太郎が国内を海外に出発した

- (13) a. 太郎が学校*を／から帰った
 b. 太郎が東京*を／から来た (同上)

次に，動作主性であるが，(14)のように動作主を持つ非能格動詞の場合は，「を」と「から」の交替が可能であるが，(15)のように動作主性のない非対格動詞の場合は [起点] を「を」で表示することができない。

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

- (14) a. 太郎が部屋を／から出た
 b. 太郎が車を／から降りた
 c. 太郎が大阪を／から出発した
- (15) a. 煙が煙突*を／から出た
 b. 涙が目*を／からこぼれた
 c. 血が傷口*を／からあふれた
 d. 荷物が網棚*を／から落ちた (同上)

一方、「経路」の場合，非対格動詞であっても「を」を表示することができる，(16)に見られるとおりである。

- (16) a. 涙が頬をつたった
 b. 汗が額を流れている
 c. 振動が壁をつたわった (三宅1996:147)

三宅は〔起点〕と〔経路〕の「を」格に見られる動作主性については，統一的な扱いはできず，別々の分析を行わなければならないとしている。以下，三宅の分析を検討する。

三宅は，語彙概念構造，項構造，統語構造の3レベルを設定し，語彙概念構造は「結び付け規則」(17)によって項構造に写像され，項構造は「投射規則」(18)によって統語構造に投射され，さらに，統語構造においては「格付与規則」(19)によってNPに格が付与されるとしている。

- (17) 項構造への結び付け規則
- a. CONTROLに統率された項は、項構造において外項の位置に結び付く。
 b. それ以外の項は、内項の位置に結び付く。 (三宅1996:149)
- (18) 項構造から統語構造への投射
- a. 項構造における外項は統語構造においてVPの指定部に投射される。
 b. 項構造における内項は統語構造においてVの補部に投射される。
 (三宅1996:151)

言語科学研究第7号(2001年)


(19) 格付与規則

- a. 対格は対格を付与する能力のある動詞がその補部のNPに付与する。
 b. 主格はVP内部においてdefault的に付与される。(同上)

では，[起点]の「を」はどのように表示されるのか．三宅は，Baker (1988) の統語編入のアイデアを概念構造における移動編入として取り入れ，(20)のように概念前置詞FROMが行路関数の位置にある場合には「から」が，(21)のようにFROMが移動し，MOVEに編入された場合は「を」が表示されるとしている．

(20) [Event MOVE x [Path FROM [Thing y]]] 部屋から出る

(21) [Event MOVE-FROM _{i} x [Path t_i [Thing y]]] 部屋を出る
 (同上)



このように，まず概念構造における意味素の移動を仮定した上で，(12b)，(12d) と(13)の非文性を一般的な仮定や原則から導き出せると議論を進めている．一般的な仮定とは，「着点の起点に対する概念構造的優位性」である．(22)に見られるように，動詞が[起点]と[着点]を両方含意する場合，「戻った所／場所」「来た所／場所」と言えば，[着点]を意味する．このことから[着点]を[起点]よりも概念的に優位な項とし，概念構造において(23)のように表示することを提案している．

(22) 太郎が戻った所／場所

太郎が来た所／場所

(23) [Path TO y [Path FROM z]]

さて，(12b)，(12d)と(13)の動詞は，[起点]と[着点]の双方を含意するが，起点関数であるFROMが移動により編入されると，次のような構造が派生される．

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

- (24) $[\text{Event MOVE-FROM}_i x [\text{Path TO } y [\text{Path } t_i z]]]$
-

三宅は，Rizzi (1990)の相対化最小性を概念構造における移動に援用し，次のように仮定する。

- (25) 概念構造における相対化最小性 (Cf. Rizzi 1990)

... X ... [... Z ... Y ...]

上の構造において、Zが次の条件を満たさない場合のみ、XはYをa統率する

- (i) ZがYに対して潜在的なa統率子であり、しかも
- (ii) ZはYをC統御するがXをC統御しない。

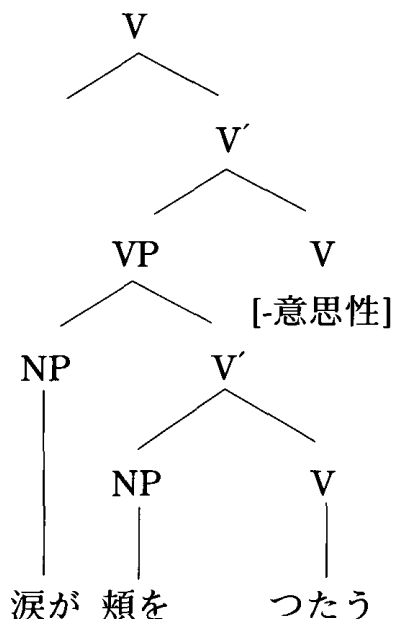
(25)により(24)は排除され，(12b)，(12d)と(13)の非文性が説明されるというのである。

さらに，動作主性に関わる制約については，次のように説明する。非対格動詞でFROMの移動編入が行われると，「主題」と「起点」の双方が内項に投射されることになる。ところが，統語構造においてVP補部（すなわち直接目的語）は一つであるため，構造的対応関係が成立せず，非文となる。

上述の三宅の「起点」の「を」格の分析は，一見「着点」との非共起性や動作主性に関する制約を説明しているように見えるが，「経路」の「を」格については，別の説明が必要となっている。その問題は，「『経路』の『を』の場合，非対格自動詞でも対格経路が可能なのはなぜか」ということである。三宅は，「起点」の「を」と「経路」の「を」の動作主性について統一的な分析を行うことを諦め，非対格動詞が「経路」の「を」をとる時には，Larson流のVP shell (Larson 1988)を用いるとしている。(26)に示される通り，「経路」に「を」格を取る他動詞（内項と外項を取るもの）を主要部とするVPが，非対格の軽動詞の補部となり，補部の動詞が軽動詞に引き上げられ，動作主性が隠蔽されるとするのである。

言語科学研究第7号(2001年)

(26) 涙が頬をつたった



(三宅1996:161)

VP-shell分析は，[経路]の「を」だけに必要なものではなく，「含む」や「覆う」のような非意思的な他動詞構文にも必要なものであるため，一般性の高い分析であると主張している。

2.2 問題

三宅の分析は，理論的，経験的問題を孕んでいる。まず，理論的問題から指摘する。三宅は，語彙概念構造，項構造，統語構造の3レベルを仮定した上で，移動による語彙概念構造の変化が結びつけ規則によって，項構造，統語構造の変化に反映されるという主張をしているのである。しかし，三宅自身が提示している結びつけ規則と移動分析によっては，[起点]の「から」と「を」の交代を説明することはできない。(17)の結びつけ規則と(20)に提示してある「～から出る」の語彙概念構造を見てみよう。(17)には，CONTROLに統率された項（すなわち動作主）以外は内項に結びつくとある。動詞「出る」はその語彙的な意味として[起点]を必ず含むので，FROMとその項も「出る」の語彙概念構造に常に含まれることになる。(20)の語彙概念構造がFROMとその項yを含んでいることがそれを示している。yは，CONTROLに統率されているわけではないから，(17)によると，

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

これは内項に結びつき，統語構造においては目的語として「を」が与えられることになる。すなわち，移動編入の適用如何に拘わらず，(17)は常に〔起点〕を「を」で表示すると指定するのである。(17)のような結びつけ規則を仮定する理論においては，概念構造内における移動を仮定しても，格助詞の交替現象に関して何らの経験的な差異を引き出す効果を持たない。このように，概念構造に適用する移動規則と(17)のような結びつけ規則とは相互に合い入れない理論的装置なのである¹。もし，移動によって「から」と「を」の交替を捉えたいのならば，概念構造を結びつけ規則と共に廃棄し，Baker (1988, 1996), Chomsky (1992, 1995), Hale and Keyser (1993, 1997)らのように，単一の生成装置である統語構造のみを仮定して移動分析の可能性を探るべきであろう。

次に経験的な問題を指摘する。まず，起点指向動詞についての一般化をどのように図るか不明である。「出発する」「発つ」は〔着点〕よりも〔起点〕を指向する動詞である(影山1996)。三宅が用いている上述のテストによると，〔起点〕が〔着点〕よりも優位である動詞ということになる。

(27) 出発した場所／ところ＝起点

発った場所／ところ＝起点

しかし，(28)の非文性が示すように，三宅が採用しているテストが示唆する項の優位性によっては，編入の可能性を正しく予測することができない。

(28) a. *太郎が大阪をニューヨークに出発した


b. *太郎が東京をシドニーに発った

さらに，〔経路〕「を」格構文についても，項の優位性という点に関して問題がある。「生徒が廊下を走る」「涙が頬を伝う」などの「廊下」「頬」については，どのように「を」格を与えるか，明示されていないが，これらの動詞はVIA，

¹ 動詞の語彙概念構造がINTO, FROM, IN, TOなどの概念的前置詞(概念機能)を含むとき，それらの項が統語構造のNPに結び付けられるのか，それともPPに結び付けられるかという問題については，Jackendoff (1987), Iwamoto (1992)に詳細な議論がある。

言語科学研究第7号(2001年)

ALONG, THROUGHなどの行路関数を義務的に編入していると考えるのが妥当であろう (cf. 影山1980).

(29) [Event MOVE-ALONG_i x [Path t_i y]]


ならば，経路に「を」格を取る動詞には，起点に「を」格を取る動詞に適用した原則が当てはまるはずである．そこで，「向かう」という動詞を見てみよう．「向かう」は(30)に見られるように，[経路]と「方向」を取る．

(30) 太郎は，東名高速を名古屋に向かった

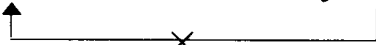
では，[経路]と「方向」はどちらが優位な項なのであろうか．(31)が示唆するように，それは「方向」である．

(31) 向かったところ／場所＝「方向」

三宅に従うと、概念構造における優位関係は次のように表される筈である．

(32) [Path TOWARD x [Path ALONG y]]

すると，(30)の動詞の語彙概念構造は，(33)となるが，これは，相対化最小性に違反する構造である．

(33) [Event MOVE-ALONG_i x [Path TOWARD y [t_i z]]]


(12b)，(12d)の非文性を説明するために取り入れられた移動編入分析は，相対化最小性により，正文である(30)を排除してしまう．日本語の空間表現全般を扱う説明理論とならないことは明白である．よって，移動編入分析は採用せず，Kuroda (1978), Tsujimura (1992)に従い，[起点]と[経路]の「を」格を意味格とする．

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

では，(12)の(a, b)と(b, d)，さらに(30)との文法的差異をどのように捉えればよいのであろうか。以下，事実関係をもう少し整理した上で，概念意味論における説明を提案することにしよう。

3. アスペクト的な相違点

「を出る／離れる」と「から出る／離れる」には，有意な意味的相違があることが指摘されている。森田（1989）は，両者の違いを以下のようにまとめている。「『から』を用いると，その地点・場所とそこ以外の場面との間に境界線を引き，ある地点を経てその境界線を越える意識（経由点），またはその範囲から別の場面へと移行する意識（起点）となる．．．[中略]．．．いっぽう『を』は移動する場面や離れ去る地点を表現の対象として取り上げる目的意識があり，そのため，『を』に先行する名詞は，その移動の行為のなされる場面（経過移動）か移動を開始する地点（起点）でなければならない」（p. 1252）²。「から」は境界線を越えるとき，「を」はそれを意味しないとき用いるという一般化は，三宅の移動編入でも可能である。[着点]が含意される場合，「を」を派生するFROMの移動編入は阻止されるからである。森田が指摘するように，「から」と「を」の間には，境界線を越えるか否かという意識の違いが存在するということは，両者の間にアスペクト的な相違があることを示唆している。ただし，以下に述べるように，「から」は境界線を越えるか否かという点に関しては曖昧であるが，「を」は決して境界線を越えないと言うのが正確である。「から」が境界線を越えるという意味を表すのは，「に」が現れるときに顕著である。アスペクト的な相違は「～から～に」と「～を」の間に明確に存在する。

両者の違いは，次に例示されている³。

² 影山（1980）には「起点表現に『から』と『を』が交換可能な動詞では，『から』は純然たる物理的移動を表す場合に，『を』はその起点名詞句の本来的機能に言及する場合に用いられる」との一般化がある。森田の一般化とは「名詞の機能」に言及するなど，異なった点もあるが，「物理的移動」が森田の「境界線を越える」に相当するなど，共通点もある。

³ (69)は，「太郎は玄関から20歩分道路に出た」の意味では解釈可能である。つまり，「道路の内側に20歩分入った」の意味である。これが「20歩歩いて道路に出た」の意味でないことに注意されたい。前者の意味は「太郎は列から1歩前に出た」において顕著であるが，言うまでもなく，このような意味は当分析においても排除すべきものではない。

言語科学研究第7号(2001年)

- (34) a. *玄関から道路に20歩出た
 b. *窓から庭に50 cm出た
- (35) a. 玄関を7歩出た（ところに灯籠を置いた）
 b. 門を10 m入った（ところに手水場がある）

「7歩」「10 m」のような距離を表す表現は、運動様態動詞など継続的な動きを表す動詞と共起し、それを限界付ける（北原1999，伊藤2000）。従って、位置変化を表す「行く」「来る」とは共起しない。

- (36) a. *学校に100歩行った。
 b. *東京に100 km来た。

これらは、「100歩歩いて、学校に行った」「100 km車で走って、東京に来た」などの意味を表すことはできない。距離を表す表現は、位置変化動詞とは相容れない。動きの開始点から開いた空間を継続的に動進する事態を限界付けるのがその機能である。このことは、(34)が位置変化を表すのに対して、(35)は動きの開始点から開いた空間を動進する事態を表していることを意味するのである。

なお、「から」は、必ずしも境界線を越えることを意味しない。次に示されるように、距離を表す表現と共起可能である。

- (37) a. 玄関から7歩出た
 b. 門から10 m入った

「着点」が顕在したり、含意されたりするときのみ、境界線を越えるのである。付言するならば、(38a)の「千葉駅方面に」は、「方向」であって、「着点」ではない。従って、距離を表す「500 m」と共起可能なのである。「起点」に「を」が用いられる(38b)においても、「千葉駅方面に」が方向を表すために正文となっている。

- (38) a. 正門から千葉駅方面に 500 m出た
 b. 正門を千葉駅方面に 500 m出た

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

さて、以上の観察から、「を」は、起点からもう一方に伸びる継続的動進を表す事態と共に用いられることが分かった。経路の「を」が継続的動進を表す事態と共に用いられることと、共通性があることに気づかれた読者もおられるであろう。両者は、[着点]の「に」と共起できないという共通点を持っている。前述の通り、[起点]の「を」が[着点]の「に」と共起できないということを三宅の移動編入分析で行うことは妥当ではない。位置変化と継続的動進に関する行路の質的差異に求められるべきものなのである。

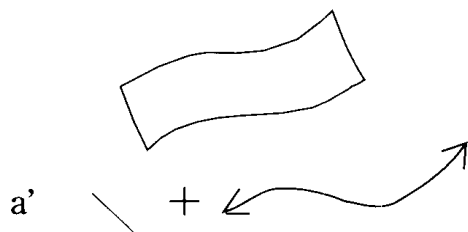
4. 概念意味論における説明

この節では、上の議論で明らかになった事実関係を概念意味論の枠組みで説明する。

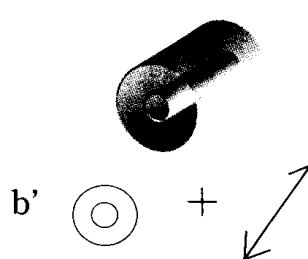
4.1 理論的枠組

本稿では、空間事態と行路の定義に物体の位相幾何学的定義を援用し、空間事態関数と行路関数をより原初的概念の組み合わせによって定義することに成功したJackendoff (1992, 1996)を用いる。Jackendoffは、柱体が断面と断面に垂直な投射軸の積によって定義されるように、空間事態も物体Xが時間Tにおいて場所Pに存在するという0次元の状態を1次元の軸で投射したものと捉える。(39a', b')はリボンやチューブの定義を図示したもの、(40)はそれらの概念構造である。

(39) a. リボン



b. チューブ



言語科学研究第7号(2001年)

(40) a. リボン

$$\left[\begin{array}{c} 1d \\ \parallel \\ [1d] \end{array} \right]$$

b. チューブ

$$\left[\begin{array}{c} 1d \\ \parallel \\ [2d \\ \text{annul shape}] \end{array} \right]$$

この概念構造では，リボン，チューブの断面である[1d]と[2d, annul shape]がそれぞれ1次元の軸によって投射されていることを示す．空間事態の定義も(40)に準ずる．時間的推移を捨象した0次元事象である状態を1次元軸で投射することによって行われるが，(41)は，空間事態の一般的定義である．

(41)

$$\left[\begin{array}{c} 1d \\ \parallel \\ [0d \\ \text{STATE}] \end{array} \right]$$

もう少し具体的に見よう．*John ran*と*John ran to the station*の概念構造は，それぞれ次のようになる．

(42) John ran

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & [1d]^\alpha & [1d]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ 0d & & \\ \text{Sit BE ([JOHN], [Space 0d]); [Time 0d]} & & \end{array} \right]$$

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

(43) John ran to the station

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} 1d \\ +b \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d \\ +b \\ \text{BDBY}^+ ([\text{STATION}]^\beta) \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d \\ +b \\ \text{BDBY}^+ ([T_i]^\beta) \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ 0d & & \\ \text{Sit BE} ([], & [\text{Space } 0d]); & [\text{Time } 0d] \end{array} \right]$$

0次元である事象断面はJohnが時間Tにおいて、場所Sに位置するというのである。RUNという事象の場合、行路は1次元的に投射し、それと相同的に時間軸（1次元）も投射する。（つまり、走った時間の長さで動いた行路の長さが対応する。）両者の相同的対応関係をJackendoffは構造保持束縛(structure preserving binding (sp-binding))と呼び、上付きのギリシャ文字による標識によってこれを表す。状態BE (0d)も1dの事象軸に投射し、構造保持束縛を受けるとされる。さらに、Jackendoffによると、(42)と(43)の違いは、行路が限界付けられているか否かによるが、Xによって限界付けられた行路軸を[1d, BDBY (X)]によって表す。終端が限界付けられたものをBDBY⁺、始端が限界付けられたものをBDBY⁻とする。（BDBYはbounded byの略号である。）また、事象軸、行路軸、時間軸が限界付けられているか否かを[±b]によって示す。従って、(43)は、stationによって限界付けられた行路をJohnが動進することを意味し、構造保持束縛によりJohnが行路の終端であるstationに到着した時、時間軸も事象軸も限界付けられるのである。Jackendoff 1996には軸の投射の様々な可能性から導き出される興味深い現象が多数議論されているが、以下の議論のためには上記の説明で十分であろう。

4.2 [起点] と [経路] の概念構造

まず、「起点」「経路」の「を」が意味格であるというX節の結論を受け、「を」NPが持つ概念構造を提案する。上で提示した枠組においては、「起点」と「経路」の概念構造は次のようになる。

言語科学研究第7号(2001年)

(44) 「を」の語彙概念構造

a. [起点]:

$$\begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} 1d \\ +b \\ \text{BABY}^- ([x]) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d] \end{array}$$

b. [経路]:

$$\begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} 1d \\ -b \\ \text{VIA} ([x]) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d] \end{array}$$

一方，Jackendoff (1996)に示された枠組では，[起点]「から」の語彙概念構造も(44a)と同一になってしまい，両者の間に見られる相的な相違点を的確に表すことはできない．既に見たように，「から」は位置変化と継続的動進いずれの[起点]をも表すことができるが，「を」は継続的動進の[起点]しか表し得ない．また，[経路]「を」も継続的動進を表すものである．Jackendoffの枠組で示されている[起点]や[経路]の概念構造のままでは，これらの差異を区別することができないのである．

本稿では，「行路」を稠密行路と非稠密行路に区別して，空間領域と所有領域における移動の相違点を明らかにしたIwata (1999)の表記法を採用し，継続的動進と位置変化における[起点]を分別することにする．Iwataは，「所有空間は連続的でない」というJackendoff (1992a, 1996b)の指摘を受け，空間領域と所有領域における行路を[±DENSE]によって区別することを提案している．この素性を用いると，[+DENSE]行路（稠密行路）と[-DENSE]行路（非稠密行路）の[起点]は次のように表し分けることができる．

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

(45) a. 稠密行路の起点

$$\left[\begin{array}{l} [1d \\ + DENSE] \\ \text{BABY}^- ([\quad]) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d]$$

b. 非稠密行路の起点

$$\left[\begin{array}{l} [1d \\ - DENSE] \\ \text{BABY}^- ([\quad]) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d]$$

なお，[経路] と非稠密行路の [着点] は以下のようなになる。

(46) 経路

$$\left[\begin{array}{l} 1d \\ + DEN \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d]$$

(47) 非稠密行路の着点

$$\left[\begin{array}{l} [1d \\ - DENSE] \\ \text{BABY}^+ ([\quad]) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d]$$

なお，[起点] あるいは [着点] のみが存在する非稠密行路は，論理的に不可能である。非稠密行路とは，「起点」と [着点] のみによって構成される行路である。従って，一方は必ず他方を含意する。(45a)と(47)は，独立のものではなく，次のように [起点] と [着点] が対となった構造を持つと考えなければならない。

言語科学研究第7号(2001年)

(48) 非稠密行路

$$\left[\begin{array}{c} [1d \\ -DENSE] \\ BDBY^-([\]) \\ BDBY^+([\]) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d]$$

一方，稠密行路は，[起点] または [着点] が他方を含意することはない。

以上のことから，[起点] の「を」，[経路] の「を」，および [起点] の「から」の語彙概念構造は，(49)のようになる。

(49) a. [起点] の「を」

$$\left[\begin{array}{c} [1d \\ +DENSE] \\ BDBY^-([\]_A) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d]$$

b. [経路] の「を」

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d \\ +DEN \\ ub \end{array} \right]^\alpha & [1d]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Sit BE } ([x], [\text{Space } 0/1d]_A); [\text{Time } 0d], & & \end{array} \right]$$

c. [起点] の「から」

$$\left[\begin{array}{c} [1d \\ uDEN] \\ BDBY^-([\]_A) \end{array} \right] \\ \parallel \\ [0d]$$

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

4.3. 動詞の語彙記載事項

[起点]，[経路]の「を」格を意味格とする分析を取るとなると，[起点]の「を」と「～から～に」の交替を許す動詞は，稠密行路と非稠密行路を要求する場合の，二つの語彙記載事項を持つという主張をしているかのように思われるであろう。しかし，この節では，文の概念意味解釈に単一化論を採用することによって単一の語彙記載事項を持つ動詞から，2種類の経路解釈が可能になることを示す。

ここでは，以下のように「出る」「脱出する」等の[起点]に「を」と「から」の交替を許す動詞は次のような語彙概念構造を持つと提案する。

(50) 出る／脱出する

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & \left[\begin{array}{c} [1d \\ uDEN] \\ BDBY^- ([Place \text{ INSIDE } ([y]^\beta)]) \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} [1d \\ BDBY^- ([T]^\beta)] \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ Od & & [Time \text{ Od}] \\ \text{Sit BE } ([x], [Space \text{ Od}]); & & \end{array} \right]$$

行路の稠密性に関しては無指定 (unspecified) とするが，その1次元軸が[起点]である[Place INSIDE ([y])]によって限界付けられている。

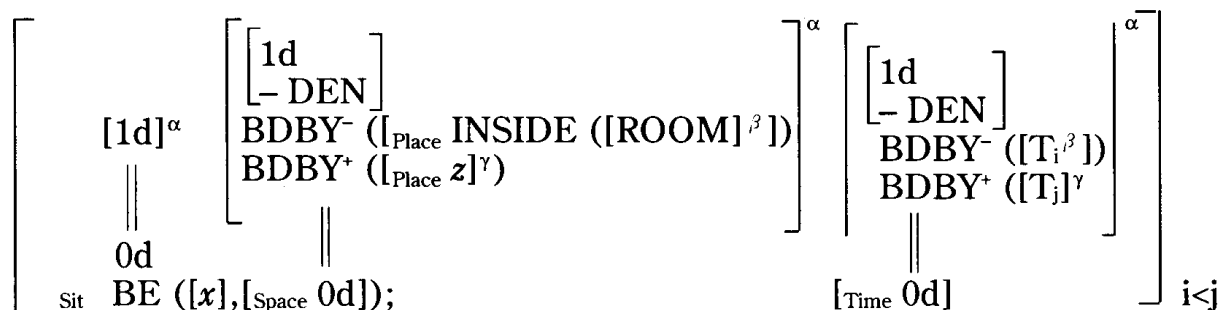
この動詞の語彙概念構造と，稠密行路の起点である「部屋を」「部屋から」，非稠密行路の起点である「部屋から」が単一化して得られる概念構造は，それぞれ以下の通りである。

(51) 稠密行路「部屋を／から」出る／脱出する

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & \left[\begin{array}{c} [1d \\ uDEN] \\ BDBY^- ([Place \text{ INSIDE } ([ROOM]^\beta)]) \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} [1d \\ BDBY^- ([T]^\beta)] \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ Od & & [Time \text{ Od}] \\ \text{Sit BE } ([x], [Space \text{ Od}]); & & \end{array} \right]$$

言語科学研究第7号(2001年)

(52) 非稠密行路「部屋から」出る／脱出する



ここで注意しなければならないのは、「出る」「脱出する」のLCS(50)と非稠密行路「部屋から」のCS(48)が単一化することによって、動詞のLCSには含まれない新たな項 $[\text{Place } z]$ が導入されることである。これは、非稠密行路が「起点」と「着点」の対によって構成されるという定義に基づくものである。稠密行路はこのように定義はされない。従って、(52)に新たに導入された $[\text{Place } z]$ と「着点」である、例えば、「庭に」のCSが単一化され、「部屋から庭に出る／脱出する」の解釈が与えられるが、稠密行路を含む(51)には「着点」を表す変項がないため、「庭に」のCSとの単一化は不可能となる。そのため「部屋を庭に出る／脱出する」は解釈不能となるのである。

「着点」を表す「庭に」との単一化についてもう少し詳しく見ておこう。まず、影山(1997)に従い「に」の語彙概念的意味を第一義的に「物の位置」を表すものとして捉える(Cf. 国立国語研究所1951, Iwamoto 1992, Takezawa 1993)。これを概念構造で表すと次のようになる。

- (53) a. 物の位置 [State BE ([Thing], [Place])]
 b. 庭に [State BE ([Thing], [Place GARDEN])]

(53b)「庭に」のCSが状態関数を含んでいることに注意されたい。伝統的な概念意味論によると、*in the garden* などのPPは、場所を指示するもので、概念的にはPLACEを表示するものと捉えられている(Jackendoff 1983, 1990)。しかし、「物の位置」という概念自体は、位置するものを項とするのであるから、「庭に」を概念的な関数と捉える必要がある。さもなくば、同じように場所PLACEを表すもの

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

でも、「庭で」のように事態の生起する場所を概念的に区別することができなくなり、記述的な一般化を捉えることすらできなくなってしまう(Iwamoto 1992, 1995). このことについては、本論の中心的議論から外れるので、別稿に譲ることにする(岩本 2001).

さて、非稠密行路を含む(52)と「庭に」の概念構造との単一化がどのように行われるかを見る。すでに述べたように、非稠密行路とは、始点と終点の2点のみを含む行路である。構造保持束縛の構造によって表示された(52)は、事象断面[BE ([x], [Place 0d]); [Time 0d]]を非稠密行路軸によって投射したものである。構造保持束縛により、BEと[Time 0d]は、それぞれ非稠密事象軸、非稠密時間軸に投射される。この事象断面は、物体xがある時刻Tにおいて空間Sに位置することを意味する。稠密行路の場合、BE, S, Tが連続的な軸によって投射され連続的動進として概念解釈を受けるが、非稠密行路の場合、行路は始点と終点のみである。従って、(52)は(54)と等価である。

$$(54) \left[\begin{array}{l} \text{BE} ([x], [\text{Place} \text{ INSIDE} ([\text{ROOM}])]; [\text{Time} T_i]) \\ \text{Event BE} ([x], [\text{Place} \quad \quad]); [\text{Time} T_j] \end{array} \right] i < j$$

(53b)は(54)と単一化し、(55)が与えられる。

$$(55) \left[\begin{array}{l} \text{BE} ([x], [\text{Place} \text{ INSIDE} ([\text{ROOM}])]; [\text{Time} T_i]) \\ \text{Event BE} ([x], [\text{Place} \text{ GARDEN}]); [\text{Time} T_j] \end{array} \right] i < j$$

これは構造保持束縛構造で表記した(56)と等価である。

$$(56) \left[\begin{array}{l} [1d]^\alpha \left[\begin{array}{l} [1d] \\ [-DEN] \\ \text{BDBY}^- ([\text{Place} \text{ INSIDE} ([\text{ROOM}]^{\beta})]) \\ \text{BDBY}^+ ([\text{Place} \text{ GARDEN}]^{\gamma}) \end{array} \right] \\ \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE} ([x], [\text{Space} 0d]); \end{array} \right]^\alpha \left[\begin{array}{l} [1d] \\ [-DEN] \\ \text{BDBY}^- ([T_i]^{\beta}) \\ \text{BDBY}^+ ([T_j]^{\gamma}) \\ \parallel \\ [\text{Time} 0d] \end{array} \right] i < j$$

言語科学研究第7号(2001年)

このように，(52)と(53b)は単一化され，(56)の概念解釈が与えられるのである。

もう一度，「部屋を庭に出る」の解釈不能性に戻る。前述のように，「部屋を出る」は「部屋の中」によって限界付けられた稠密有界行路を進むことを意味する。「部屋を庭に出る」は，稠密行路と「着点」とが単一化できないことによるが，これは，稠密行路を概念的に要求する「走る」「歩く」「泳ぐ」などの動進様態動詞が「着点」と共起しないこと（影山1997）と同一の現象である。影山（1997）は，移動推進と位置変化はアスペクト的に相互排他的であり，単位的な概念構造が両者を同時に表示することはできないため，「駅に走る」が非文となると説明している。両者と同時に表示するためには，概念構造の合成が必要であり，日本語では「駅に走っていく」のように動詞が形態的に合成されることによって，語彙概念構造が合成されるが，一方，英語の場合は，*run to the station*のように形態的な合成がないため，語彙概念構造の合成は概念部門の中で行われるとしている。「部屋を出る」は，我々の分析によると継続的動進であるので，「部屋を庭に出る」の非文性も，継続と変化のアスペクト的齟齬によるものと説明されるかもしれない。しかし，影山自身指摘しているように，日本語には継続的動きと位置変化が一つの動詞に語彙化されているものが少数であるが存在する。影山は次の動詞を挙げている（p. 133）。

(57) 移動する，行く，渡る，上る，往復する，退く，進む，移る

(58) a. 彼女は泳いで，英仏海峡をイギリスからフランスに渡った
b. 夜行列車は東海道を京都から静岡に進んだ

語彙化パターンの観点から見ると，少数であるかもしれないが，これらは，アスペクト的齟齬という観点から「経路」と「着点」の組み合わせを排除することができないことを意味している。「に」が動進様態動詞とともに現れて「着点」を表すことができないのは，「様態」と「着点」が同時に動詞の意味の中に取り込まれる語彙化パターンが存在しないことに求められるべきことで（Talmy 1985, 田中・松本1997），アスペクト的齟齬によるものではないのである。

構造保持束縛構造を用いる分析では，この事実其自然な説明が与えられる。ま

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

ず、(57)の動詞には次の語彙概念構造が仮定される。(このリストの中で「往復する」は「～を～から～に」のパターンが現れない。また、「渡る」は移動の方向性が他のものと異なる(影山1980)。これらの動詞の語彙概念構造は別に考えなければならない。)

(59)

$$\left[\begin{array}{c} [1d]^\alpha \\ \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE } ([x], \end{array} \left[\begin{array}{c} [1d \\ -DEN] \\ \text{BDBY}^- ([\text{Place } y]^\beta) \\ \text{BDBY}^+ ([\text{Place } z]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha; \left[\begin{array}{c} [1d \\ +DEN] \\ \text{BDBY}^- ([T_i]^\beta) \\ \text{BDBY}^+ ([T_j]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha \right] \left[\begin{array}{c} \parallel \\ 0d \\ \text{[Time } \end{array} \right] i < j$$

(58b)を例にとると、[起点]の「京都から」はBDBY⁻([Place y])と、[着点]の「静岡に」はBDBY⁺([Place z])とそれぞれ単一化される。これらの単一化は前述の非稠密行路における[起点]と[着点]の単一化と同様である。(52)–(56)参照のこと。)

(60)

$$\left[\begin{array}{c} [1d]^\alpha \\ \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE } ([x], \end{array} \left[\begin{array}{c} [1d \\ -DEN] \\ \text{BDBY}^- ([\text{Place } \text{京都}]^\beta) \\ \text{BDBY}^+ ([\text{Place } \text{静岡}]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha; \left[\begin{array}{c} [1d \\ +DEN] \\ \text{BDBY}^- ([T_i]^\beta) \\ \text{BDBY}^+ ([T_j]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha \right] \left[\begin{array}{c} \parallel \\ 0/1d \\ \text{[Spac } \text{東海道} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \parallel \\ 0d \\ \text{[Time } \end{array} \right] i < j$$

[経路]である「東海道を」の概念構造は、(61)である。限界性が無指定ub (unspecified for boundedness) となっているのは、この種の経路表現は有界行路とも非有界行路とも解釈される曖昧性を持つからである(Jackendoff 1996)。

言語科学研究第7号(2001年)

(61)

$$\left[\begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} 1d \\ + DEN \\ ub \end{array} \right] \\ \parallel \\ 0/1d \\ \text{Space 東海道} \end{array} \right]$$

(61)は(59)と単一化され、次の概念構造を表示する。

(62)

$$\left[\begin{array}{c} [1d]^\alpha \\ \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE } ([x], \left[\begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} 1d \\ + DEN \\ BDBY^- ([Place \text{ 京都}]^\beta) \\ BDBY^+ ([Place \text{ 静岡}]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel \\ \left[\begin{array}{c} 0/1d \\ \text{Space 東海道} \end{array} \right] \end{array} \right); \left[\begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} 1d \\ + DEN \\ BDBY^- ([T_i]^\beta) \\ BDBY^+ ([T_j]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel \\ [Time \ 0d] \end{array} \right] \end{array} \right] \quad i < j$$

表記法について付言する。(61)は「東海道」が、その断面を1次元軸によって投射された構造を持つことを表している。(62)では事象軸、行路軸、時間軸の間の構造保持束縛関係を示すために投射軸が「東海道」を含むSpaceの括弧の外に外置されているが、それ以外は(61)と表記法の差異はない。以上のように、構造保持束縛構造を用いると、[起点] [経路] [着点] を同時に含む概念構造はアスペクト的な撞着をきたすこともない。従って、(63)の解釈不能性は、[経路]と[着点]のアスペクト的撞着によるものではないと考えることになるのである。

- (63) a. *大通りを駅に走る
- b. *部屋を庭に出る

本稿が採用する理論的枠組では、これらの文は単一化が阻止されるために解釈が不可能になると分析される。「大通りを走る」「部屋を出る」の概念構造は以

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

下のようになる。

(64) a. 大通りを走る

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d \\ + DEN \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d \\ + DEN \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ 0d & \left[\begin{array}{c} 0/1d \\ \text{Space 大通り} \end{array} \right] & \\ \text{Sit BE } ([x], & & \text{Time } 0d] \end{array} \right];$$

b. 部屋を出る (= (51))

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d \\ + DEN \\ \text{BDBY}^- ([\text{Place INSIDE } ([\text{ROOM}]^\beta)]) \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d \\ \text{BDBY}^- ([\text{T}]^\beta) \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ 0d & \left[\begin{array}{c} \text{Space } 0d] \end{array} \right] & \text{Time } 0d] \end{array} \right];$$

これらのCSには、「駅に」や「庭に」など [着点] のCSである [State BE ([x], [Place STATION])] や [State BE ([x], [Place GARDEN])] と単一化するための [BDBY+ ([y])] が行路の投射軸に含まれていない。従って、これらの単一化は行われず、「大通りを駅に走る」や「部屋を庭に出る」は整合的概念解釈を受けることができず、解釈不能文として排除されるのである⁴。

以上の分析には、次のような反論が予想される。「もし、『出る』のLCSが(50)のように『起点』の変項のみを含み、『着点』の変項を含まないのであれば、(65)のように『着点』だけが現れる文も、『着点』の単一化は行われず、解釈不能文として排除されてしまうのではないか。」

(65) 太郎が庭に出た

⁴ 概念構造においても、語彙機能文法で仮定されている「整合性の原則」(Kaplan and Bresnan 1982) に対応する原則が必要であること、また、概念意味論における「整合性の原則」の形式については、Iwamoto (1992, 1999) を参照されたい。

言語科学研究第7号(2001年)

しかし，(65)には次のような説明が可能である．(50)のLCS ((66)に再掲)を参照頂きたい．

(66) 出る

$$\left[\begin{array}{c} [1d]^\alpha \\ \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE } ([x], \end{array} \left[\begin{array}{c} [1d \\ uDEN \\ BDBY^- ([Place \text{ INSIDE } ([y])])^\beta \end{array} \right]^\alpha ; \left[\begin{array}{c} [1d \\ uDEN \\ BDBY^- ([T]^\beta) \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel \\ [Time 0d] \end{array} \right]$$

このLCSは，稠密性に関して無指定である．つまり，何れの値を取ることとも可能である．もし，値をマイナスにするならば，非稠密行路の定義により，[起点]と[着点]が対で表示される．

(67)

$$\left[\begin{array}{c} [1d]^\alpha \\ \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE } ([x], \end{array} \left[\begin{array}{c} [1d \\ -DEN \\ BDBY^- ([Place \text{ INSIDE } ([y])]) \\ BDBY^+ ([Place \text{ }]) \end{array} \right]^\alpha ; \left[\begin{array}{c} [1d]^\alpha \\ \parallel \\ [Time 0d] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

この構造と[着点]「庭に」のCSとは単一化され，(68)が得られる．

(68)

$$\left[\begin{array}{c} [1d]^\alpha \\ \parallel \\ 0d \\ \text{Sit BE } ([x], \end{array} \left[\begin{array}{c} [1d \\ -DEN \\ BDBY^- ([Place \text{ INSIDE } ([y])])^\beta \\ BDBY^+ ([Place \text{ GARDEN}]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha ; \left[\begin{array}{c} [1d \\ +DEN \\ BDBY^- ([T_i]^\beta) \\ BDBY^+ ([T_j]^\gamma) \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel \\ [Time 0d] \end{array} \right]$$

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

稠密性の値をマイナスに決定することにより，「着点」の変項が導入され，LCSとの単一化が行われる。このように，「庭に出る」の解釈は，「出る」のLCSが稠密性に関して無指定であることと，非稠密行路が「起点」と「着点」によって構成されるという定義によって適切に与えられるのである。

一方，稠密性の値をプラスにすると，「着点」の変項は現れず，「庭に」のCSとの単一化は行われなことになる。このことは，次の文がそれぞれ「5歩進んで庭に出た」「100歩進んで道路に出た」という解釈を持たないことによっても支持される。

- (69) a. *太郎は5歩庭に出た
b. *太郎は100歩道路に出た

つまり，稠密行路を「5歩」ないし「100歩」進むということと，「庭に到着する」こととは合い入れない。これは，「出る」のLCSが「着点」である[BDBY+([_{Place}])]を固有の意味として含んでいないことを意味している。稠密性の値がマイナスとされることによって初めて導入されるのである。

5. 動作主性について

三宅の移動編入分析を動機付ける事実の一つは，「起点」に「を」と「に」の交替が見られる動詞の主語は，「を」の場合動作主だけしか許されないということであった。三宅は，「Burzioの一般化」を根拠に「起点」の「を」を構造的対格と捉える分析を行ったのである。しかし，「起点」の「を」が意味格であり，構造的対格ではないとうことは上の議論において既に明確である。最後に，この事実が，概念意味的観点からどのように説明されるかを短く述べ，稿を閉じる。

三宅は，継続的動進の経路が「を」で表される場合，主語の動作主性は問題とならないという事実も指摘しているが，この場合「起点」の「を」とは別扱いにしなければならず，統一的解決を提案できずにいる。しかし，この両者の対比こそが問題の事実に対する概念意味的解決を示唆しているのである。

静止しているものが動く場合，次の二つの何れかの可能性しかない。

言語科学研究第7号(2001年)

- ①自らの内的能力や特徴によって起動する場合
- ②外的な働きかけによって位置が変化する場合

①と②は、それぞれLevin and Rappaport Hovav (1995)の「内的起因事態」、「外的起因事態」に対応する。Levin and Rappaport Hovavによると、外的起因事態が自動詞文として実現する場合、「主題」を主語とする非対格構文となる。一方、内的起因事態は非能格構文となる。自ら起動する内的能力や特徴を持たない静止した物体の場合、その場から移動するためには外的働きかけに依らざるを得ず、外的起因事態となるのである。Levin and Rappaport Hovavが主張するように、外的起因事態は変化を表す。本稿の理論的枠組においては、位置変化は非稠密行路を含む事態である。つまり、自ら起動する内的能力や特徴を持たない静止した物体の場合、[起点]は非稠密行路の[起点]である「から」を取らざるをえないのである。動作主の場合は、自ら起動し稠密行路を動進することも、自らを位置変化使役の対象とすることもできる。従って、[起点]として「を」、「から」の何れも可能である。一方、物体がある[経路]を進む事態を表す場合、動作主性如何によって進むべき行路の稠密性が問題になることはない。従って、どのような主語であっても[経路]は「を」を伴うのである。

このように、[起点]に「を」を取る場合、動作主が要求され、[経路]は動作主性に関りなく「を」が与えられるという事実について、経路の稠密性という観点から整合的説明がなされるのである。

6. 結論

[起点]を表す「を」と「から」の交替は、統語的な編入によって引き起こされる現象ではない。両者間の意味的な相違は、これらが異なった概念構造を持つことを意味している。三宅が統語的移動編入分析の証拠として挙げた「を」と「に」の共起を禁ずる制限は、統語的移動に関する制約によるものではなく、「出る」などの動詞が持つ語彙概念構造と行路「を」が持つ概念構造の単一化によっては、[着点]「に」が概念的に認証されないということ、すなわち、[着点]「に」との単一化が阻止されるということによるのである。この分析は、語彙項目が持つ概念的意味と単一化の様態を精密に検討することによって、問題となる

空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について

現象が概念的な計算の帰結であることを明らかにした。さらに、[始点]と[終点]しか含まない非稠密行路と、稠密行路を区別する[±DENSE]の採用によって、単一化の可能性の範囲を明確にすることができ、概念意味論の記述力と同時に説明力が向上した。

[±DENSE]という素性は、事象のアスペクト的特徴を明示的に表すための一つの重要な要素である。これまで、概念意味論では、事象のアスペクト的特徴は[±bounded]によってのみ表されていたが、この素性の採用によって、事象内部のアスペクト特性に言及できるようになり、事象外のアスペクト形式素との概念意味的干渉の研究に与えられる理論的装置が一つ増えることになる。

参考文献

- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: a theory of grammatical function changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Baker, Mark. 1996. *The Polysynthesis parameter*. New York: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam. 1992. A minimalist program for linguistic theory. Ms. MIT, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist program*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Gruber, Jeffery 1965. Studies in lexical relations. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Gruber, Jeffery. 1975. *Lexical structures in syntax and semantics*. Amsterdam: North-Holland.
- Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *View from Building 20*, ed. Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser, 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser. 1997. On the complex nature of simple predicates. In *Complex predicates*, ed. Alex Alsina, Joan Bresnan and Peter Sells, 29-65. Stanford: CSLI Publications.
- 伊藤真哉. 2000. 「事象解釈における限界点の機能について」神田外語大学修士論文.
- Iwamoto, Enoch. 1992. Visibility and Argument Identification: A conceptual semantic approach to Alamlbak and Japanese. Ph. D. dissertation. ANU, Canberra.
- Iwamoto, Enoch. 1995. A theory of thematic computation and Japanese spatial expressions.徳永美暁（編）平成6年度文部省科学研究費補助金（一般研究（B））研究成果報告書『言語変容に関する体系的研究及びその日本語教育への応用』209-243頁. 神田外語大学
- Iwamoto, Enoch. 1999. Inalienable possession constructions in Alamlbak. In *Linguistics in search of the human mind*, ed. Masatake Muraki and Enoch Iwamoto, 279-306. Tokyo: Kaitakusha.
- 岩本遠億. 2001. 「進行相と二格後置詞句の認可について—概念意味論による接近法—」研究報告『先端的言語理倫の構築とその多角的実証(5)』（COE形成基礎研究費）：神

言語科学研究第7号(2001年)

田外語大学

- Iwata, Seiji. 1999. Thematic parallels and non-parallels: contributions of field-specific properties. *Studia Linguistica* 53(1), 68-101.
- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1987. The status of thematic relations in linguistic theory. *Linguistic Inquiry* 18, 369-411.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1992a. *Languages of the mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1992b. Parts and boundaries. In *Lexical and conceptual semantics*, ed. Beth Levin and Steven Pinker, 9-45. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Jackendoff, Ray. 1996a. Conceptual semantics and cognitive linguistics. *Cognitive Linguistics* 7, 93-129.
- Jackendoff, Ray. 1996b. The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.
- 影山太郎. 1980. 『日英比較 語彙の構造』松柏社.
- 影山太郎・由本陽子. 1997. 『語形成と概念構造』研究社.
- Kaplan, Ronald and Joan Bresnan 1982. Lexical-Functional Grammar: a formal system for grammatical representations. In *The mental representation of grammatical relations*. ed. Bresnan, Joan, 173-281. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 北原博雄. 1999. 「日本語における動詞句の限界性の決定要因」黒田成幸・中村捷（編）『ことばの核と周縁』くろしお出版
- 国立国語研究所. 1951. 『助詞・助動詞』秀英出版
- Kuroda, Shige-Yuki. 1978. Case-marking, canonical sentence patterns and counter equi in Japanese. In *Problems in Japanese syntax and semantics*, ed. Hinds, John and Irvin Howard. Tokyo: Kaitakusha.
- Larson, Richard. 1988. On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19, 335-392.
- Levin, Beth and Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 三宅知宏. 1996. 「日本語移動動詞の対格表示について」『言語研究』110号, 143-167.
- 森田良行. 1989. 『基礎日本語辞典』角川書店.
- Rizzi, Luigi. 1990. *Relativized minimality*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Shibatani, Masayoshi. 1977. Grammatical relations and surface cases. *Language* 53, 789-809.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館
- Takezawa, Koichi. 1993. Secondary predication and locative/goal phrases. In *Japanese grammar in comparative syntax*, ed. Nobuko Hasegawa, 45-77. Tokyo: Kuroshio.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In *Language typology and syntactic description*. ed. Shopen, Timothy, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- 田中茂範・松本曜. 1997『空間と移動の表現』研究社.
- Tsujimura, Natsuka, 1992. *An introduction to Japanese linguistics*. Cambridge, Mass.: Blackwell.